

高島善哉の「経済社会学」への旅立ち

——学問的世界の形成過程を探る——

上 岡 修

はじめに

多くの読者を得た名著『社会科学入門』（岩波新書）の著者である高島善哉先生については、今やその名さえ知る人は少なくなったと推測される。しかし混迷の時代であればこそ、いわゆる「昭和」の全期にわたって批判的社会科学者として生きぬき、独自の市民社会論を構想した先生の学問的生涯からは、今なお学ぶべきことは少なくないと思われる。

高島先生の学問的生涯は三つの時期に分けて考えることができる。先生は、「仮に僕の研究成果を三期に分けてみると、第一期は『（経済社会学の）根本問題』が出るまで、第二期は終戦後から一橋（大学）をやめるまで、第三期は関東学院（大学）に行ってからのも」と自らも語っている。

第一期は、「経済社会学」が構想され、生涯にわたる方法的立場が苦闘の末に確立されていった時期である。本稿では、先生の学問の形成過程のうち、「経済社会学」の構想と方法的立場の胚胎過程を、東京商科大学予科・本科時代の学問への情熱から、純粹経済学批判をへて「思想的転換」にいたる歩みのなかに辿ってみたい¹⁾。（高島善哉先生は、本誌記念号をもって感謝する名誉教授上野格先生の師であり、両先生は筆者の恩師であるが、以下

1) このような課題に取り組むときには当然、歴史状況と合わせて考察されなければならないが、本稿では触れない。なお、拙稿「高島善哉の政治活動への関わり」（渡辺雅男編『高島善哉——その学問的世界』こぶし書房、2000年所収）は限られた範囲ではあるがそのような問題への接近を試みたものである。

本文中では敬称を省略して単に高島善哉と記させていただくことにする。)

1 東京商科大学予科入学——学問への出発

(1) 商大受験

高島善哉は、満 16 歳の春、東京商科大学予科に入学した。

当時、商大の予科は旧制の高等学校と同格であり、五年制の中学校の四年終了でも受験が認められていた。高島は 1921 (大正 10) 年 3 月、岐阜県立岐阜中学校四年終了で受験した²⁾。そのときの予科入学志願者数は 1,772 名、前年度の 45% 程度に激減したが、それでも競争率は 8.4 倍もあり、合格・入学したのは 211 名という大変な難関であった。前年は東京高等商業学校が予科をもつ東京商科大学へと昇格したことによって猛烈な競争となったのであった³⁾。

高島は、岐阜中学受験には 2 番で合格し⁴⁾、中学校時代は一高か商大予科といった一流校へ入りたいということだけを考えて毎日を送った。岐阜市内にあった学校へは毎朝 6 時には家を出て夕方 5 時ころ帰り、帰宅後は夜中の 12 時まで勉強を続けた。学校の授業と受験よりほかにはほとんど眼を向けず、四年間主席を通した優等生であり、模範生であった。

かれは、商大予科の受験には自信をもっていた。数学がややできなかった以外いずれの科目もほぼ満点であった。しかし、それでも合否の結果には受験生としての不安もあった。4 月に入ってすぐ神田の洋服屋から学生服の注文を勧める手紙がきたので、松枝村役場に行って官報を見たところ、合格者名のなかに間違いなく自分の名前を確認することができた。息子を銀行家にするつもりで商大受験に賛成した父も喜んだし、さらに母の喜び

2) この時代の岐阜中学では、200 人の内、上の学校に行くのは 20 人位だったという。学校は岐阜市の中心部、長良川に隣接し金華山も望める所に位置している。明治 6 年 2 月創立、明治 34 年 6 月 20 日県立岐阜中学校と改称 (大正 12 年 3 月まで) (岐阜県立岐阜高等学校「ホームページ」参照)。

3) 『大学昇格と竜城事件』如水会学園史刊行委員会、1989 年、95 ページ。

4) 1 番で合格したのは後に詩人となった近藤東であったという。

は一入であった。やはり人気の商大に合格したことは嬉しかったし、かれの優越感を十分に満たしてくれた。

しかしかれ自身、一高ではなく商大を志望したのは、社会科学の勉強がしたいとかという理由からではなかった。東京高商が商科大学に昇格した直後で人気があり、また父の意向もあったとはいえ、当時商大生だった中学の先輩の一人に相談にいったことが作用して、偶然でそうなったとかれは回想している。

(2) 予科入学

予科入学後はじめのうちは日本橋の丸善近くの叔父の家に厄介になっていたが、岐阜の生活に比してあまりの違いに憂鬱な日々であった。そうした入学直後の5月8日、母が37歳の若さで死去した。それは高島にとっては「急死」であり、「非常なショック」であった。かれは「そのときはじめて、この広くさわがしい東京の真中に自分は独りぼっちなのだ、という孤独感を味わい」、「生まれてはじめて運命の不条理を知った」という⁵⁾。

まもなく鶴巻町の方へ下宿を探して移り、東京の生活にも慣れていった。

高島の生家は濃尾平野のほぼ中心に位置する農村にあって、質素な生活をしていたが、中地主で祖父も父も地方銀行家であったので、毎月50円の仕送りによるかれの東京での学生生活は経済的には恵まれたものであった⁶⁾。

このように予科生活が始まったのであるが、入学した当時の文学や哲学への関心と勉強への情熱について、後年つぎのように述懐している。

「あのころは白樺派の影響が強かったですね。哲学としては左右田哲

5) 高島善哉・長洲一二『社会科学——見かた・考えかた』青春出版社、1957年、44ページ。高島善哉『自ら墓標を建つ——私の人生論ノート』秋山書房、1984年、13ページ。

6) 高島が一時期入寮していた岐阜県の学生寮の寮費は諸費用込で1ヵ月15円位であった。(高島善哉「おじいちゃんの話——インタビュー、高島善哉の一生」関手：高島千代、1984年録音。)

学、西田哲学の本がどんどん読まれていた。だから自然にそういう影響を受けますよ。それから演劇とか、芝居とか、いろいろなものの新風が入ってきたでしょう。築地小劇場とかね。とにかく東京へきて初めて文化というものに接したわけです。郷里をでたこともない人間ですから、何を見てもたいへんな刺激です。神保町を歩いたって、本屋があれば並んでいるから、昼間の休み時間なんてみんなそこを片っ端から歩いた。それだって楽しいし、すべて大きな刺激でしたね……その(白樺派の)影響は強いでしょうね。自分の中にもそういうものがあったんでしょうね。非常にロマンティックな理想主義的な青年だったらしい。そのころ、ぼくが一番好きな言葉は『創造的努力』という言葉です。いまでもその通りです。絶えず勉強して、絶えず何か新しいものにぶつかっていこうという気持ち、これは自分で言うのはおかしいが、純真なきまじめな青年だったんでしょう。だから正義感はあったと思います。』⁷⁾

こうしてかれは、東京へきてはじめて本当の勉強ができるようになったと実感し、その意味で解放感に満たされるようになっていった。

(3) 学問への出発

商大では外国語教育が熱心に行なわれた。予科では、シェークスピアやアラン・ポーその他有名な文学者のものが教科書に使われた。授業には哲学や数学や歴史があり、社会にあたるものには経済通論とか法学通論とかがあり、それらは本科(学部)、で学ぶ専門科目の前の概論にあたるものであった。

予科時代の高島が、はじめ哲学や文学に興味を持ったことはさきに触れたが、これは当時の商大予科生の多くに共通するところでもあったようで

7) 高島善哉『人間・風土と社会科学——続・私の人生論ノート』秋山書房、1985年、202-03ページ。

ある。かれはつぎのように回想している。

「予科が初めてできた頃は哲学への欲求が熾烈であった。我々はそこでスケジュールの中に哲学の講義を取入れるために戦った。この場合哲学は学問意識そのものの意味で、哲学のための戦いは高商の遺物に対する反抗に外ならなかったのだ。文学への熱情でさえもがそうであったと言える。」「予科生は商科大学予科生であるにも拘わらず、いつでも哲学や文学を求めた……簿記や商業学は彼等にとって永遠に *Dismal science* であるだろう。」⁸⁾

生真面目で理想主義的な青年高島は、河上肇の『社会問題研究』などばかりかさず読んだ。しかし「勉強する」という態度で読んでいたのであって、社会観、人生観、世界観を変えるというようなところまでは行かなかったという。

それでも徐々に河上・福田論争等で、社会主義への関心を持つようになり、また、ツルゲーネフの『父と子』や『処女地』などから、予科での勉強とは直接の関係なしに、社会に眼をむけるようになっていった。それと同時に、昇格直後の東京商大のアカデミックな雰囲気が、かれの学問への情熱をかきたてていった。後年かれはつぎのように回想している。

「この新興大学には学問的雰囲気が充満していました。」「福田徳三、三浦新七、上田貞次郎、左右田喜一郎とか我々の憧れの星だったそういう人がいて、学問的雰囲気を堪能させてくれました。そういう事があったので自然に学問しようとする気になった。」「いずれは本科へ行って本当の勉強ができるという気持ちだった。」⁹⁾

高島は左右田喜一郎にもひかれ、将来哲学者になろうと決心して本科

8) 高島善哉「社会認識の出發」『一橋新聞』第386号、予科版、1939(昭和14)年4月25日。

9) 高島善哉「学問・人生・社会(I)——高島善哉教授に聞く」『経済系』第119集、1979年3月、87-88ページ、高島『人間・風土と社会科学』202ページ。

(学部) のゼミナールの参加願いを出したほどであったが、結局経済学を選んだのである¹⁰⁾。

2 東京商科大学本科(学部)時代——「私の二人の恩師」¹¹⁾

高島は、19歳で東京商科大学本科に進学した。本科に進んでからもかれは学問に夢中になっていた。当時数人いた一流の教授の講義が面白く、大学へ行くのが楽しみであったという。

1924(大正13)年4月に本科一年に入学した学生のうち、「日本で一、二を争う先生と言われていた」福田徳三のプロゼミナール¹²⁾に参加を許された学生は多くはなかった。「先生が偉くて怖いから」、「優秀な人でなければ、そのゼミへは来なかった」のであったと、かれは語っている。高島や山田雄三ら8人であり、ゼミのテキストはメンガーの『国民経済学原理』(Carl Menger, Grundsätze der Volkswirtschaftslehre, 2. Aufl. 1923)であった。しかし、その夏休み明けの9月にはゼミナリストンによるその分担翻訳の提出期限に遅れた2人が除名となり、また他の1人は自発的に退学し、それ以後は残り5人で続けられた¹³⁾。

高島は、福田のもとでは前記のメンガーのほか、バーム・バヴェルク、フリードリヒ・フォン・ヴィーザーといった限界効用学派の勉強を続けた。

しかし、1年後の1925(大正14)年3月12日に福田徳三は夫人同伴で

10) 高島『自ら墓標を建つ』54ページ。高島『人間・風土と社会科学』54ページ。左右田哲学に心酔した高島は、リッケルトやヴィンデルバントやカントを読み、リッケルトの翻訳を学友の追悼文集に寄稿した(1925年)。

11) 高島『自ら墓標を建つ』48ページ。

12) 最初の一年はこう呼ばれ、2, 3年の本ゼミと二段階に分かれていた。東京高等商業学校にゼミナール制度が布かれたのは明治30年、大正9年大学に昇格するに際して更に附加された制度がこれである。『一橋大学年譜』1976年、『一橋新聞』第9号、1924(大正13)年11月15日などを参照。

13) 「みんなほかの友達もやっつけられるからね、自分もやっつけられるし。だから負けないように勉強をした。」とも語っている(高島「おじいちゃんの話——インタビュー、高島善哉の一生」)。『一橋大学学問史』1986年、1211ページ。『一橋のゼミナール』1983年、320ページ。

渡欧したため、つぎの2年間は5人のゼミナリストは大塚金之助のゼミナールに預けられた。高島たちは、1924（大正13）年1月に約四年間の留学から帰国した大塚の指導のもとに卒論をまとめていくことになった¹⁴⁾。

高島が福田徳三のゼミナールで学んだのは結局本科一年の時だけであったが、商大在学中に受けた人格の影響は大きかった。福田の「総合的な直観」と学問的態度としての「真理愛」であった。かれは後年つぎのように記している。

「真理愛 *Wahrheitsliebe* の一語こそは博士がその師ブレンターノ先生より受けつがれた学問的態度を表現している。博士に師事した短い期間に何を学ぶことができたかと自ら省みて、忸怩たらざるを得ない私の耳染にただ一つ、いつでも力強くこだまする言葉は即ちこの *Wahrheitsliebe* の一語である。」¹⁵⁾

大塚のゼミナールでの指導方法は、福田のそれとはまったく違っていたという。「大塚先生のやり方は福田先生のやり方と正反対でした。全然干渉しないのです。細かいことはなにもいわないで、ひとつの大きな方向というものだけを指示するわけです。」そして大塚がゼミナールで高島たちに指示した大きな方向というのは、「ブルジョワ経済学をやりながらそれを社会化するというテーマ」なのであった¹⁶⁾。

この「経済理論の社会化」という大塚のことばはかれの心に深く大きく

14) 『一橋のゼミナール』の「福田ゼミナール」の「ゼミナリスト」欄には、「途中から大塚ゼミに移される」と注記してその5人の氏名が記載されている。同書、322ページ参照。

15) 高島善哉「福田徳三博士を語る」『一橋新聞』号外、予科版、1940（昭和15年）年7月10日。そこでは、高島はまたつぎのようにも述べている。「我々はそれ（先師の残された教え）に沈潜すると同時にそれを踏み超えて進まねばなるまい。しかしこの場合偉大なる先師を踏み超えるためには何よりも先づ勇猛心が必要であろう。真理のための戦いの心が必要であろう。そして真理のための戦いは真理への愛を前提している。」

16) 高島・長洲『社会科学』47-48ページ。山田雄三は、厳しい、研究心を刺激する福田の指導に比して、大塚の指導は「率直にいった少々拍子抜けの感をいだかされた」と述べている。『一橋のゼミナール』320-21ページ参照。

響きわたり、そのテーマは「迷っていた」高島がそこから脱出へと向かう導きとなった。そのころを回想してかれはつぎのように述べている。

「福田先生の影響で、限界効用学派（メンガー、ボエーム・バヴェルク、ヴィーザー）の勉強から経済学の門に入った私は、この派の経済学の非社会的性格にだんだんあき足らなくなってきた。ちょうどそのとき外国留学から帰ってこられた大塚先生が『経済学の社会化』という言葉で私の悩みに救いの糸口を与えて下さった。」¹⁷⁾

そこでかれは「限界効用学派を勉強しながら、それを社会化しようと考え、限界効用学派を一生懸命勉強」した。さらにクラークやシュムペーターも研究し、「限界効用理論をいかにしたら社会化できるかと、これを卒論のテーマにし」、しかもそれを方法論的に行なったのであった¹⁸⁾。

高島にとっては、福田徳三からと同時に、福田のそれとは違った意味で大塚金之助の影響は大きかったのである。

3 卒業論文

高島の卒業論文は「経済静学と経済動学の国民経済学的意義——ヨセフ・シュンペーターの一研究——」と題されている。

かれはこの論文の冒頭につぎの一節を掲げ、この問題に答えることが本論文全体の趣意であると言明している。

「資本主義経済の発展に伴う経済社会の複雑化の結果は、経済理論の領域にも明瞭に反映し、理論に於ける歴史的なるもの、社会的なるもの、流動的なるもの、の意義が問題となるに至った。所謂純粹経済理論に於て、此等の歴史的なるもの、社会的なるもの、流動的なるもの、が如何にしてその实际的重要な認識され得るであらうか。その实际的重要な認識し得るとしても理論上如何にして、此等のものと純粹理論とを結合し得るのであ

17) 高島『人間・風土と社会科学』55ページ。

18) 高島・長洲『社会科学』48ページ。高島、前掲、208ページ。

るか。この二つのものは理論上全く相矛盾する二つの事実であると考え
ことは果して正当なる経済学的認識と謂い得るであろうか。若し之に反し
て両者が合して一つの国民経済的全体、統一的経済現象を形造るものとす
るならば、この二つのものは如何なる理論的組織を以て科学的に包摂し得
るのであるか。』¹⁹⁾

ここには、高島の問題意識が鮮明に出ている。当時、「純粹経済理論と、
歴史的なるもの、社会的なるもの、流動的なるもの、との対立」を問題と
することは、オーストリア学派に対する批評として最も有力なものであつ
た。しかも「此の種の問題は当に理論の意義を明らかにし、その妥当の根
拠と認識の権利とを確立せんとする者には最も枢要な関心事」であつた。
高島は「他の多くの人々と同じように、オーストリア学派の潮流に棹さし
て、内在的自己批判の間に右の中心問題に触れて見度い」と考えたのであ
つた²⁰⁾。

こうして高島は、純粹経済理論に対する批判の旅に船出したのであつた
が、このような問題意識は、後に1941(昭和16)年に刊行された処女作『経
済社会学の根本問題』を貫く問題意識でもあつたのであり、この卒論のう
ちにその萌芽があつたと見るべきであろう²¹⁾。

高島自身は後年つぎのように述懐している。

「今日にいたるまで、私の研究はほとんど経済学の個別問題に入るこ
となく、経済学の基礎前提ともいうべき領域や、経済学の方法論に関

19) 『高島善哉著作集』第1巻、こぶし書房、1989年、10ページ。

20) 『高島善哉著作集』第1巻、11ページ。

21) 高島ゼミ一期生であつた一橋大学の山田秀雄名誉教授は、恩師の卒論の意義
に触れて最近大略つぎのように述べている。まさに純粹理論に歴史的、社会
的なるものは含められるのか含められないのか、新たな理論はもし必要なら
純粹理論に歴史的、社会的なるものをいかにして接合できるのか、これは
『経済社会学の根本問題』とある意味ではまったく同じ発想なのであるが、も
うそれが卒論に出ている。これはだから高島の「経済学事始め」なのである。
大塚金之助の影響を受けながら大塚の示唆の下に、福田徳三門下から離れた
ということなのである。(聞手：相良重雄、長田五郎、上岡修、2002年6月。)

する問題に限られてきた。私の問題意識はすでに私の卒論の中に示されていた。』²²⁾

即ち、「吾々は現実の社会経済生活を理解するに当り、単に純粹経済事象の範囲内にのみ止り得るであろうか」と問い、そして結局は「いままでの経済学は静態的にものを考えていた。しかしほかにもっとダイナミックな考え方をする必要がある。」というのが、高島の問題意識なのであった²³⁾。

当時高島が、なぜ静学、動学といった問題に関心を寄せるようになったのかについては、後年つぎのように振り返っている。

「静態的とか動態的とかいう言葉が、その頃だんだんと日本の経済学界でも使われるようになっていた。当時の東京商大教授であった高田保馬先生などは盛んにそういう用語を使われたので、私なども自然にそういった問題に興味をひかれたものらしい。』²⁴⁾

卒論の本論では、ヴィーザー (F. von Wieser) からはじまり、クラーク (J. B. Clark) とシュンペーター (J. Schumpeter) とオッペンハイマー (F. Oppenheimer) の3人の経済学者を取り上げ、ヴェーバー (Max Weber) にも言及し、「クラークを静態優位説の見本に、シュンペーターを静態動態分離説の見本に、オッペンハイマーを静態擬制説（一種の動態優位説）の見本にとり上げ」て論じている²⁵⁾。

しかし、実際に研究を進めるにあたってその中核となったのは、当時世界的に有名であったシュンペーターの「経済静学と経済動学」説の批判的研究であった。

その結論は、シュンペーターにおいては、「明らかなる事は静学と動学とは互いに独立して交渉しないと云う事」なのであった。すなわち、シュ

22) 高島『人間・風土と社会科学』54 ページ。

23) 『高島善哉著作集』第1巻, 60 ページ。高島『人間・風土と社会科学』208 ページ。

24) 高島『人間・風土と社会科学』53 ページ。

25) 高島『人間・風土と社会科学』54 ページ。

ンペーターの研究では結局、動学と静学とが統一できない。そういうことで課題が残るとしてこの卒論は終わっているのである。ここではシュンペーターの経済社会学の考察はなかった。「結び」の末尾近くは、結局つぎのように締めくくられている。「吾々はメンガーに行くのかマルクスに行くかは以上を以ては少しも決定されていない。」と²⁶⁾。

40年ちかく後の高島の回想はつぎのようなものである。

「このとり上げは着眼としてはおもしろかったと思うが、そしてこの論文をみて下さった大塚金之助先生は一つの独創性を認めて下さったという話を後からきいたのであるが、自分としてはまだ混沌としていて、結局どういう結論に達したのかいまではさっぱりおぼえていない。」²⁷⁾

4 助手時代

(1) 助手論文まで

1927(昭和2)年3月、高島善哉は東京商科大学の学士試験に合格し、商学士となった。三井銀行の入社試験に通ってはいたが、卒業後は大塚金之助の推番で大学に残る道を選んだ。

東京商大では、この年から助教授昇任および助手制度に変更が加えられた。「新たに補手の制度が設けられ、従来助教授には助手中から不文律的に昇任されていたが、今後は助手、補手中から優秀な者が選ばれる」ことになった。「助手は官吏で有給、補手は非公式無給、いずれも在任期間は二年、補手定員10名、毎年5名ずつ採用」と改められた²⁸⁾。

この新制度一年目の助手には予科講師の本多謙三と新卒の高島の2名が、補手には山田雄三、山中篤太郎ら5名が任用された。助手の発令は5月24日、給与は75円であった²⁹⁾。

26) 『高島善哉著作集』第1巻、125、128ページ。

27) 高島『人間・風土と社会科学』54ページ。

28) 『一橋大学年譜』84ページ。

29) 『大学昇格と麓城事件』370ページ。『一橋新聞』第52号、1927(昭和2)

昭和初年という危機を孕んだ時代のなかで助手として大学に残った高島は、在学中に「学んできた学問は私に勇気と自信をつけてくれるにはほど遠いもの」と思うようになっていった。そのかれを「待ちうけていたものは、マルクス主義の思想と科学であった。」³⁰⁾

東大には「新人会」が生まれ、学生がセツルメントを創ったり、進歩的な教授もつぎつぎに現われてきた。そういう動きや、学生の読書会に参加することを通して、また大塚ゼミの学生の影響をうけて、高島は「思想的な大転換」を遂げていった。しかし、その基礎は大塚の指導の下で、自らの経済学の考え方を学びとるなかで築かれていったのであった³¹⁾。

1928(昭和3)年には、大塚金之助のすすめにより、マルクスの『剰余価値学説史』の翻訳に着手した。また、ルカーチの『歴史と階級意識』を二人の友人と一緒に読んだのもこのころであった³²⁾。

そして、『『資本論』の深さと大きさをを知る』に至った高島は、「このとき生まれてはじめて読書の情熱を全身に感じた。」と述べている³³⁾。

(2) 「思想的転換」

そのころの自己の内面からの変化を伴った精神の軌跡を高島はつぎのよ

年6月6日参照。なおこの年高島は、当時東京商大の研究科で研修中であった杉本栄一とともに東京社会科学研究所の研究員にもなっている。この研究所は、尾高朝雄が出資し、尾高邦雄、岩崎卯一、田辺寿利らによって設立され、大塚金之助がその所長に迎えられて同年9月に発足している。この研究所には大塚の意向で内外の社会科学文献が豊富に蒐集され、大塚ゼミの学生や関係者はそれらを自由に利用できた。高橋彦博「東京社会科学研究所の社会実験」『大原社会問題研究所雑誌』第479号、1998年10月、上岡修「高島善哉の政治活動への関わり」、渡辺雅男編『高島善哉の学問的世界』こぶし書房、2000年参照。

30) 高島『人間・風土と社会科学』60-61ページ。

31) 高島「学問・人生・社会(Ⅰ)」参照。高島は「僕の思想的転換の下地が大塚ゼミにいたからできたんです。福田ゼミにとどまっていたらそういうことはできなかったでしょう。」とも述懐している(高島『人間・風土と社会科学』209ページ)。

32) 高島「私の古典」『日本読書新聞』第888号、1957年2月25日。

33) 高島『自ら墓標を建つ』46ページ。

うに述懐している。

「限界効用学派のような考え方で現実の経済や社会がわかるだろうか。どうもさっぱりわからないのです。……それで僕は行きづまって、神経衰弱になってしまいました。学問をやめたいとまで思ったのです。そのため大塚先生から、『そんなことではいけない』としかられたものです。それがひとつの転換期でした。……その頃、学内に、学生の手で唯物論研究会などが生まれ、僕もそれに出席するようになりました。……眼が開けるような気がしました。それで、これはマルクスを読まなければダメだ、と考えるようになったのです。……最初読んだのは『経済学批判序説』です。……そこで新しい世界にぐんぐんひき入れられていきました。そういう思想上の一大転換の過程をとったわけなのです。……

自分の学問のやり方について、悩みに悩み抜いた僕は、大塚先生に長い手紙をつぎつぎに書きました。先生から、それに対して温情のこもった激励の返事をいただいたりしていました。そのうちに、二、三の友だちとルカーチの『歴史と階級意識』を読むようになりました。その書物には、人間のものの見方の基礎には階級的なものがあるということがはっきりと書いてありました。

そこから私は自分の考え方や感じ方、社会の見方や対し方が、これまで地主の息子という立場からなされていたことを、実感としてさとするようになりました。そのことを大塚先生に手紙に書いて出しました。そしたら大塚先生の返事に、『これは君の生涯における最大の発見だろう』と書かれてあって、その言葉にまた僕は感激しました。そのころから、マルクスを熱心に研究するようになったのです。』³⁴⁾

こうした「思想的転換」の結果として高島は、「在学中三年の結晶である卒論」すなわちそれまでの経済学の自分の「考え方を清算する意味で、

34) 高島・長洲『社会科学』48—52 ページ。

……静態と動態を結びつけるもう一つの上位の論理」を明らかにしようと、一つの論文「静観的経済学止揚の方法」を1928（昭和3）年11月に書き上げた。当時「助手は二年間で、二年たったら本決まりのテストをすることになっていた」ので、この論文を引続いての任用を求める「助手採用論文」（「助手論文」と呼ばれることが多い。）として、マルクスの『剰余価値学説史』上巻の訳を添えて1929（昭和4）年に提出した³⁵⁾。当時を振り返って高島はつぎのように述べている。

この論文は「私が手さぐりした問題にはじめて活路を見出してくれたもので、それは私の生涯の研究コースを決定することになった。それはマルクスが『経済学批判』で素描し、『資本論』においてみごとな結実をみせた方法なのである。」「この論文には、マルクスの『経済学批判序説』の思想と論調の影響がはっきりと現われていたように思う。」³⁶⁾

(3) 助手論文

その巻末に大塚金之助への謝辞が附記されている助手論文はつぎのような構成となっている。一「序説」、二「流通と生産——理論」、三「経済静学の理論的変質過程」、四「理論に於ける游離と理想化」、五「マルキシズム経済理論の客観性」。

本論中の三では、クラーク、シュンペーター、オッペンハイマーの三者の静学の系列をたどることにより静的観念の変質過程をたどり、四では、クラーク、シュンペーター、オッペンハイマーについての総括的な批判を行ない、五では、マルクスによるブルジョワ経済学の止揚過程を跡づける、という展開になっている。

35) 高島『人間・風土と社会科学』212 ページ。

36) 高島『人間・風土と社会科学』55, 61 ページ。高島の助手論文は大学の『商学研究』に掲載される予定であったが、廃刊となったため未発表に終った。『思想』への掲載も林達夫らにより考慮されたが実現しなかった。林達夫「谷川徹三宛書簡」『林達夫著作集』別巻Ⅰ，平凡社，1987 年，138 ページ参照。晩年の高島はこの論文の公表を希望していたが、存命中は実現しなかった。

論文の冒頭では、静観的経済学を規定してつぎのように述べている。

「社会的経済現象の理論的把握にあたり、単に流動する現象の羅列的な立場に止まって経済理論の具体的意義を認めないか、若しくは、経済理論の重要性は認めるが、その把握の仕方が実は一面的・抽象的(非歴史的) なるために、必然に将来への展望を失い、かくして何れにしても意識的にか無意識的にか、究極に於て現存の資本主義経済機構の永遠性の理論的是認に導かれるところの一連がりの経済学を指して云う。」³⁷⁾

続いて、理論と歴史の問題について高島はつぎのように述べている。

「経済理論の本質は、生々流転する経済諸現象を、一般性に於て、言い換えれば科学的な一義性 (Eindeutigkeit) に於て、把握することに在る。それが如何なる意味に於てでもあれ、歴史性ということは具体的経済現象に付き纏っている。これに対して一般性ということは科学理論の要求である。若し事象の歴史性の故に、如何なる意味に於ても理論の一般性を斥け、したがって理論そのものを否認するならば、論者は必然に、単に現象起伏の羅列的な記述に墮落するか、若しくは、超科学的なる観念方法に超躍することにより、も早経験科学者たることを止めるであろう。従って吾々の問題は、この意味に於ける歴史と理論の対立に在るのではなくして、却ってその綜合に在る。またそれは必然に綜合されねばならなかったし、その綜合も亦可能でなければならぬ。」³⁸⁾

さらに高島は歴史学派と限界利用学派の歴史性をつぎのように捉える。

「歴史学派も限界利用学派も、その立場こそ異なれ、経済現象の流動性・個別性及び歴史性を否認するものではむろんない。併し彼等の謂わゆる流動性・個別性及び歴史性は、資本主義的生産方法の支配する

37) 『高島善哉著作集』第1巻, 130 ページ。

38) 『高島善哉著作集』第1巻, 132 ページ。

限りの、それを前提としてその上に現れる限りの、経済現象に於ける流動性・個別性及び歴史性である。彼等の一面的な眼には、前提そのものの流動性・個別性及び歴史性が蔽い隠されているが故に、必然の結果として、歴史的発展の真に全面的なる批判に到達することが不可能となり、従って、彼等の謂わゆる流動性・個別性及び歴史性は経済現象の単純なる変化ということに帰し、言葉の究極の意味に於て、彼等はただ量的変化を取扱うに過ぎぬこととなる。」³⁹⁾

以上のように静観的経済学、そして理論と歴史を捉えた高島は、ブルジョアジーのイデオロギーが客観性を失わなければならないとすれば、「経済理論の分野に於てもその理論の客観性失墜の過程が指摘されねばならぬ筈であろう。私は明らかにこの過程を看取し得ると考える。」として、本論でその過程を論じた⁴⁰⁾。

そして、「マルクスは一方に於て理論と歴史との関係を真に統一的に把握すると共に、他方に於てこれらの二つの方法的手続きを、完全に自家業籠中のものとしている⁴¹⁾」しだいを、マルクスのブルジョア経済学の止揚過程を論じるなかで明らかにしていったのである。

自らの新たな経済学を求めて苦闘を続けた高島は、それまでの自分の経済学に対する見方を「清算」し、新たな学問的立場の確立に歩み出したのであった。そのような意味でこの助手論文は、高島自身にとっての転換点をなしていたのである⁴²⁾。後年かれはつぎのように述懐している。

「そのとき以来、私はもはや静態や動態については語らなくなった。そしてこういう言葉をもっぱら近代経済学の特殊専門家たちに任せることにした。」⁴³⁾

39) 『高島善哉著作集』第1巻、135-136 ページ。

40) 『高島善哉著作集』第1巻、137-138 ページ。

41) 『高島善哉著作集』第1巻、167ページ。

42) 山田秀雄名誉教授は、助手論文は「マルクス学事始め」なのであったと語っている。(聞手：相良重雄，長田五郎，上岡修，2002年6月。)

しかし問題意識においては、卒業論文において胚胎したものが、助手論文においても「貫く棒の如きもの」として基底に据えられていたのであった。このことは、その後の高島の学問的生涯の「通奏低音」をなしていくことが予想されるのである。

(4) 『新興科学の旗のもとに』への二論文

助手論文と前後して高島は、三木清が編集していた雑誌『新興科学の旗のもとに』に寄稿すべく二篇の論文を執筆した。これは知友本多謙三のすすめによるものであった、一篇は「金利生活者経済学最後の型——リーフマン経済学の一批判」と題され、他の一篇は「価値論なき流通論——リーフマンの限界収益均等の法則を中心として」と題された。前者は第2巻第3号(1929年3月号)に、後者は第2巻第4号(1929年4月号)に掲載された。いずれもリーフマン(Liefmann, R.)を真っ向から批判したものであった。

リーフマンの「近代企業組織の理論的研究」と「理論経済学における限界収益説の徹底」とは、「両方面ともに商大学間には久しい前から紹介され」、とくに後者は福田徳三が心酔していたのであって、かれは「一橋に由緒深き」ドイツ経済学者の一人であったのである⁴⁴⁾。

リーフマンの経済学を批判したこの二篇はともに「恩師福田徳三先生の経済学を批判するという青年学徒の客気に溢れ」、「いくらか調子の高いもので」、高島としては「新しい信仰告白のつもりであった」。ところがこの批判論文は「恩師福田先生の逆鱗にふれ」ところとなったのである。その証拠には、「高島はマルクス・ボーイだ。あれじゃ困る」とレッテルをはられ、「東京商大助手のポストから下りなければならないことになって

43) 高島『人間・風土と社会科学』55ページ。同書、61ページ参照。

44) 宮田喜代蔵「一橋に由緒深き先生の新経済理論の暗示」『一橋新聞』第199号、1934(昭和9)年11月27日。

しまったからである。]⁴⁵⁾

1929 (昭和4) 年7月2日付で高島は補手を命ぜられ、7月4日付で助手を免ぜられることとなった。

高島はつぎように述懐している。

「このときから私のささやかな抵抗の時期が始まった。抵抗といっても、私の弟とはちがって、私は実践活動にとび込むことはできなかった。パッションを外へでなく、内側へ向けるのが私の人柄である。弟はとうとう牢獄につながれ、大学は途中で退学、後に太平洋戦争に召集され、南方で不明の戦死をとげてしまった。兄の私のほうには、これに反して内面的な抵抗が続いた。当時一世を風靡していた福本イズムや日本資本主義の研究よりは、ルカーチの『歴史と階級意識』のほうがずっと自分の心に迫るものがあった。学生時代から私には哲学へのひそかな思慕があって、これは今日にいたるまで続いている。だがこれは底流でしかなく、私の抵抗はやっと学説史研究の上に一つの噴火口を見つけ出すほかはなかった。』⁴⁶⁾

助手のポストを失った高島は、予科で、それまでの「経済通論」(「原書購読」)のほかに、吹田順助の好意により「ドイツ語」を担当することに

45) 高島『人間・風土と社会科学』45, 62, 211 ページ。山中伊知郎は福田徳三の経済学の一面に関して当時を振り返ってつぎのように回想している。「先生の、時代に対する敏感さについて、これまた長所と短所があって、ある場合には非常に早いテンポで先生自身は移って行かれて、われわれは付いて行けないというような感じを持つことがありました。ある場合には、あとから先生がみずから、あれはどうも少し自分は尊敬し過ぎたということを後悔されるような場合もありました。例えば、ロバート・リーフマンであります。リーフマンが1920年頃に、大きな新学説を発表しまして、……福田先生はこれを捕まえて、非常に喜ばれた。……これに飛びつかれたのであります。しかし、あとになりますと、どうもリーフマンにもの足りない。……自分はこの当時少しリーフマンに心酔しすぎていたのではないかと反省されています。ちょうど心酔されておったときに先生のゼミナールに参加した学生は結果としてはたいへん迷惑したわけであります。」(同「福田徳三博士の経済学」『三田評論』第676号、1968年11月)。

46) 高島『人間・風土と社会科学』62 ページ。

なった。吹田が東京商科大学に転じたのは1925（大正14）年であり、高島の本科二年の時であったが、吹田は「ドイツ語」の真面目な受講生高島を覚えていたのであった。

高島の予科講師は1935（昭和10）年まで続いた。その間、「経済通論」でアダム・スミスの『国富論』を取り上げ、「ドイツ語」を教え続けた⁴⁷⁾。

その後、1933（昭和8）年には、大塚金之助が逮捕、起訴されて学園を追われ、杉本栄一も検挙され、学校と教育、学問への弾圧も熾烈を極めていった⁴⁸⁾。高島自身も同年12月には杉並署に拘引され特高の取調べを受け、岩波文庫のための『剰余価値学説史』の訳稿もかれの手の届かないところに葬り去られた。そのようなファシズムの嵐なかにあって、高島善哉は、時局とそれに迎合する諸理論への抵抗と批判の灯火を守りぬくことをやめなかった研究者、教育者のひとりであり続けた。

研究の自由を奪われた「暗い谷間」のなかで、ザリーンの「経済学史」の研究に向かい、歴史学派への回帰から、アダム・スミスの市民社会体系の研究を通して、「経済社会学」の探求へと歩を進めた高島善哉の学問的苦闘の歩みを解明することが、つぎの課題とされなければならない。

47) 1929（昭和4）年7月、予科講師としての高島の報酬の年額は660円であった。高島『人間・風土と社会科学』212ページ参照。

48) 高島が所員であった東京社会科学研究所周知1934（昭和9）年には解散に追い込まれ、貴重な文献、資料の主要なものはすべて官憲により持ち去られた。「聞書東京社会科学研究所周知」語り手・尾高邦雄』『大塚会会報』第7号、1984年12月、大塚金之助「小椋君への言葉」『大塚金之助著作集』第6巻、岩波書店、1981年、149ページ、上岡修「高島善哉の政治活動への関わり」『高島善哉——その学問的世界』196-197ページ参照。